

講演会報告書

講演名：「こうのとりのゆりかご」から始まる第2の人生

日時：2026年5月11日

講師：宮津航一さま

場所：尼崎市議会棟 総会室

参加者： 津田 加子男

寺坂 美一

小 久博

磯田 雅司

大谷 哲介

もみのき 純加

報告者： もみのき 純加

1. 講演概要

今回の講演では、「こうのとりのゆりかご」に預けられ、里親のもとで育った宮津航一さんから、ご自身の生い立ちや「出自を知る権利」、子どもを取り巻く社会の課題についてお話を伺った。

宮津さんは、熊本市の慈恵病院に設置されている「こうのとりのゆりかご」に預けられた後、児童相談所での一時保護を経て、里親のもとで育った経験を持つ。ご自身の経験をもとに、家族とは何か、子どもにとって出自を知ることとは何か、そして社会に何が求められているのかについて語られた。

2. 「こうのとりのゆりかご」と子どもたち

講演では、2024年度までに「こうのとりのゆりかご」に預けられた子どもは193人にのぼることが紹介された。また、熊本県内だけではなく、関東をはじめ遠方から預けに来るケースも多いという。

預けられた子どもの中には、身元が分かっている子どももいれば、身元が分からないままの子どももいる。そのため、誕生日や生い立ち、幼少期の写真など、自分自身のルーツを知るための情報を持たない子どももいる。

宮津さんは、自分の出自を知ることについて、「出自が分からないことも出自なのではないか」と考えるようになったと話された。何も知らないという事実もまた、その人自身の人生の一部であり、それをどのように受け止めていくかが重要であると感じた。

また、講演では「真実告知」の割合が18%であることにも触れられた。子どもが自分の出生や生い立ちについて知る機会をどのように保障していくのか、そして出自に関する情報をどのように適切に管理し、次の世代へつないでいくのかという課題が示された。

3. 宮津さん自身の歩みと家族

宮津さんは、これまで通称で生きてきた時期を経て、現在は本名を名乗っている。自身の名

前や生い立ちを含め、自分がどのような人間なのかを知り、受け止めていくことは、アイデンティティを形成する上でも大切なことであると感じた。

また、宮津さんは「家族は与えられるものだけではなく、みんなで作っていくもの」という考えを大切にしている。

その考えのもと、親子を主な対象とする「子ども大学」を開講。「いのち学」を中心に講義を展開。親子で学び、子ども達の知りたいに応えるための活動を実施されている。

4. 「預ける場所」ではなく「相談できる場所」へ

講演の中で特に印象に残ったのは、「慈恵病院のこうのとりのゆりかごは、子どもを預けるための場所ではなく、まずは相談してほしい」という場にするための場所であるということ。

妊娠・出産をめぐる、一人で悩みを抱え、誰にも相談できないまま出産を迎える人がいる。そうした状況に対して、預けるという最終的な選択に至る前に、相談できる環境を整えることが重要である。

また、「内密出産」についても触れられ、妊娠・出産に関する不安や孤立を抱える人が、安心して相談し、必要な支援につながるができる社会の必要性を考えさせられた。

5. 講演を通しての所感

宮津さんは、「こうのとりのゆりかご」が社会に映し出したものを、未来を生きる子どもたちのために伝えていきたいという思いを語られました。

「ゆりかご」の存在そのものを批判したり、誰かを責めたりするのではなく、まずはなぜこのような仕組みが必要とされているのかを理解することが大切であるという言葉が印象に残りました。

「こうのとりのゆりかごは最後の砦であり、シンボルであるべき。最終的には、ゆりかごを必要としない社会を目指したい」という考えからは、ゆりかごそのものを存続させることが目的なのではなく、子どもや妊娠・出産をめぐる困難を抱える人が孤立しない社会をつくることこそが大切なのだと感じました。

今回の講演を通して、胸が熱くなり、学ぶことが多い講演でした。「こうのとりのゆりかご」を単に子どもを預けるための施設として捉えるのではなく、そこに至るまでの背景や、子どもたちが抱える出自の問題、家族や社会の在り方について考えることが重要だと学びました。社会全体でその課題について考えていく必要があります。

さらに、困難を抱えている人を責めるのではなく、まずその背景を理解し、相談できる環境や支援につながる仕組みを整えることが大切であると感じました。

尼崎市にも児童相談所が立ち上げられたが、今回の講演で語られた「ゆりかごを必要としない社会へ」という言葉を目標に、子どもたちが安心して生まれ、育ち、自分自身の人生を歩んでいける社会をつくるために、これからも取り組んで参りたいと思います。